
レキ「ボルト・アクション式以外は認めません(キリッ——ただしS V Dは別腹です」

しんかー

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レキ「ボルト・アクション」式以外は認めません（キリッ——ただしSVDは別腹です」

【Nコード】

N8829U

【作者名】

しんかー

【あらすじ】

ドラグノフで二キロ狙撃……物理的に無理だろ、ということではキタンヒロインのリア二次ですよ。ノノフィレンツェの刺客として育てられたレンツォは、故郷と袂を分かちイ・ウーのメンバーとなる。

ブローグ（前書き）

一流の狙撃手は、任務に合わせて使用する銃や弾薬を選定します。レキたんは一流のはずなので、最大射程が通常五〇メートルほどのSVDしか使わないのはおかしいよね。

しかも、ボルト・アクション式ならともかく、命中率の低いオートマチックにこだわりのある狙撃手なんていませんから、原作は不自然なんです。

ブローグ

白く濁った空の下、凍てつくロシアの岡の斜面で一組の男女がそれぞれにレンズを覗いていた。針葉樹の林の隙間から、遠く遠くの標的を見つめている。

「距離二四〇。ヤード。東南東の風、平均風速秒速一。フィート。偏差調節八分、上方修正一六分プラス二クリック」

防寒帽をかぶった黒髪の少年が弾着標定鏡を覗きながら、傍らに伏せて狙撃銃——L115A3——を構える小柄な少女に言った。少女は言われた通りにスコープの角度を修正し、エレベーション・ノブを二クリック回す。ライフルの位置を調整して自然狙点に合わせる。

「カートリッジの温度は？」

問いかけの間、少女は微動だにしない。観測手を勤める少年も、同様に動かず答えた。

「セルシウスで五度だ」

「分かりました……撃ちます」

それから数秒、少女は世界から切り離される。彼女の特徴的な青みがかった髪に覆われた頭の中では、重力、空気密度、弾薬の温度にロットナンバー、グードゥー効果やマグナス効果、果ては地球の自転による影響までもが再計算され、照準の精度を確かめられる。

石造りの壁に背を預けて煙草をふかす標的の男との間に、遮蔽物はない。少女は引き金に指をかけた。息を吸って、数秒止めてから、吐く。心拍数が下がる。

（私は、世界最高の狙撃銃……）

心の中で呟く。口に出したりはしない。そんなことをすれば、隣の彼にまた叱られてしまう、『照準に集中しろ』と。

（撃ち抜けないものなどない……）

引き金を絞る。

（あつてはならない……！）

発射。

サブレッサー

減音器を通過した三三ハラプア・マグナムが衝撃波を生み出しながら標的の男へと飛んでいく。銃口を出て数秒、弾丸は弧を描き、吸い込まれるようにして男の胸へと着弾した。観測手の少年が、崩れ落ちる男を見て弾着を確認する。

「……命中、標的はほぼ即死。流石だな、レキ」

「ありがとうございます」

世界記録レベルの超長距離からの狙撃達成に何ら感動も示さず、小柄な少女、レキはL115A3のボルト・ハンドルを起こしコックして次弾を装填した。地面に落ちた薬莢も忘れず回収する。

「行きましょう、レンツォさん。長居は無用です」

「ああ、そうだな」

レンツォは弾着標定鏡やレーザー測定器、携帯用風速計、三脚などを背囊にしまっていく。すると途中で腰に固定していた平べったい魔法瓶を取り出して、レキに手渡した。

「冷えただろう。かれこれ二時間も待ったからな」

レキはキャップを開け、渡されたボトルの内容物がウイスキーであることを確認すると、短く謝辞を述べて舐めるように飲みだした。アルコールを口の中で転がし、飲み込む。徐々に体が火照ってくる。そうこうしている内にレンツォの方も用意が整ったようで、レキはボトルを返すと銃を担いで歩き出した。

レンツォはウイスキーを一口飲み元あるところに戻して、小さな狙撃手に追隨した。

彼らが東京武偵高に入学する、半年ほど前の話である。

第一話 フィレンツェのレンツォ

アサシン。語源はイスラームだが、フィレンツェにおける彼らの歴史は一四世紀にさかのぼる。彼らは影に潜み、形式を変え、以後数百年に渡って存在し続けた。

今日における彼らは、武偵という形で社会に溶け込んでいる。

／／／

レンツォは孤児である。年はもいかないうちには、『教会』に引き取られた。彼はそこで読み書きを習い、異国の言葉を学び、刃物の取り扱いを教わった。

バチカンに渡ってから、イラク帰りの元国家憲兵から小銃を教え込まれた。

「あんたは誰だ？」

レンツォの目の前には、英国風の紳士服を纏った長身の男性がたたずんでいた。鷲鼻に、全てを見通すような瞳。整った顔は人のよさそうな笑みを浮かべている。

「はじめまして、レンツォ君。僕のことには“教授”^{プロフェッサー}と呼んでくれたまえ」

レンツォは怪しげなその男を人睨みすると、すかさず懐から拳銃を抜き放ち、発砲した。狙いは脚、膝の側面。当たれば臍が傷つき、

立っていらなくなるだろう。

バチカンの警備は嚴重だ。時に魔の者と対峙する彼らにとって、不審者への攻撃に躊躇はない。

マテバ・オートマチック・リボルバーから発射された三五七マグナムが目標へと正確に飛翔する。が――

金属音と二重の銃声。

相手は無傷。

「……今、何をしたんだ？」

レンツォの黒い瞳が驚愕に染まる。一瞬、相手が動いたように見えた。そして、放った銃弾が消えた。

「何てことはないさ、迎撃しただけだよ」

「“迎撃”？」

“プロフेशन”と名乗る男は子どもでもあやすような――実際に子どもだが――穏やかな表情で答えた。

ありえない、レンツォの脳内に不可思議がこだまする。今の一瞬にも満たない時間で銃を抜き、あまつさえ音速の銃弾を撃ち落としたというのか。

「人外……？」

「僕はちゃんと人間だよ。少しばかり長生きしたがね」

男の飄々とした態度にレンツォは理解を諦め、話を進めることに

した。自分では勝てないことを悟ったのだ。マテバの銃口に向けたまま、問い掛ける。

「あんたがおかしな技能を持ってるのは分かったよ。で、このバチカンに何の用だ？」

レンツォは内心激しく動揺していた。今まで自分が生きてきた常識が完全に崩れ去ったのだ。男との距離は一五メートルほど。パルス信号が運動神経を介して腕に伝わるよりも早く、銃弾が届くはずだった。

“教授”はなおも世間話でもするかのように言葉を返す。

「いや、バチカンにはこれといって用事はないよ。用事があるのは――」

風切り音が聞こえたと思ったら、“教授”はレンツォの目の前に立っていた。

「君に、だ。」

「……お、俺？」

「そうだよ。僕はある団体を束ねていてね、そこに君をスカウトしたい。“イ・ウー”というんだが、言うなれば学校のような場所だね、互いが持つっている技術を教え合っただ。もちろん僕も教えるだけじゃなくて、教えられることもある」

イ・ウー、聞いたことがないが、この人外にすら思える男の率いる組織。そこにいる人材はこの男の指導を受けた猛者であることは容易に想像できる。

人の枠を超えた力を“技術”として磨いている。レンツォにはイ・ウーが正体不明ながらも魅力的な場所に思えた。この男にできた、なら自分にもできるはずだ。彼の自尊心がそう訴えていた。

「俺にも、あの射撃やその歩法を修得できるか？」

「君の努力次第だ。人間本気になれば、できないことはあまりない」

「そうか、面白いな。ここの連中はやれエイメンだのジーザスだの、思想という枠組みがなきゃ力を成立できない分からず屋ばかりでうんざりしてたんだ。……俺も混ぜてくれよ、そのイ・ウーとやらに」

「力は、ただ力でしかない、か」

「そういうこと」

レンツォは一三歳にして、イ・ウーのメンバーとなった。

／／／

「もう行くんだね」

「ああ、世話になった。これから世話になるけど」

「構わないよ、そのためにネットワークがある。補給が必要ならいつでも要請してくれ」

レンツォがイ・ウーに入団しておよそ一年。もろもろの技術を修

得し、いよいよ旅に出て自らの力で生計を立てていくことになる。これまでも実戦は何度も経験しているが、今回は長丁場だ。既に武偵免許は取得済み。後は現地で態勢を整え、仕事をするだけだった。

「君は早熟だった。呑み込みも早かったしね」

「そういう風に育てられたからな。人間本気になれば、できないことはあまりない。俺はその言葉通りにしただけだよ」

レンツォはマテバをくると回して握ると、スーパー・スペクトラ製の防弾ジャケットの内側にしまい込んだ。

「君は何のために力を求めるんだい？」

いつもの調子で何気ない風に“教授”——シャーロックは尋ねた。

「プライドのためだ。この程度できないはずかない、できなければ恥だ、そういう気持ち弱いままであることを拒絶する。半端な力じゃダメだ、そんなものはないのと大差ないからな」

それと、と付け加えて言う。

「……守りたいものができたときに、力がないから守れませんでしたじゃ話にならないだろう？」

レンツォは大きめのフードをかぶり、シャーロックに背を向けた。ポストーク号の鉄の床が足裏のゴムと触れるたび低く鳴る。

「レンツォ君」

微細な風の音と共に小さな物体の気配を察知し、レンツォは振り返って手をかざす。数瞬の後、掌に一発のカートリッジが収まった。シャーロックに目を向けると、卒業生を送り出す先生のような顔で彼は言った。

「閃光タイプの武偵弾だ、危なくなったら使いなさい。それとも一つ、相棒は早めに見つけておくことをお薦めするよ」

レンツォは受け取った武偵弾を確認する。四四口径のリボルバー用弾薬だ。弾丸部分の先端にカラーリングされた色で閃光弾だと分かる。

彼は過保護な先生に口端を歪め、言い放った。

「――絶対に使うものか。まあ、バディについては考えておこう。できれば狙撃手がいいな」

距離に関わらずそれなりに戦える自信はあったが、彼がもともと好んでいるのが狙撃だった。狙撃手は通常二人一組でチームを作るのだ。

武偵弾をポーチにしまって彼は再び歩き出した。目指すは弾薬庫、改造有人魚雷である。

「いつてらっしゃい」

時間は現地時刻。二〇〇時。誰にも別れを告げず、レンツォ・ディ・フィレンツェ”は旅立った。

.

第一話 ファレンツェのレンツォ（後書き）

スーパー・スペクトラについて。

スペクトラはハニウェル社が開発した防弾ベストの新素材です。ケブラー繊維より四割強く、引っ張り強度で鋼の一五倍というとても素材（実在）。繊維を樹脂で結合させてるそうです。

この作品に登場するスーパー・スペクトラはツイスト・ナノ・ケブラー繊維を特殊樹脂でくっつけた超防弾素材という設定。

第二話 ファイター・オブ・ガンマン

「冗談じゃない……」

ヤクーツクの寂れたビルの一室で、レンツォは狙われていた。左肩に感じる防弾素材越しの鈍い痛みで顔をしかめる。

「弾着と銃声の時間差から鑑みて、距離はおよそ七〇〇メートルつとそこか。にしても、本当にSVDか？」

彼が聞いた銃声は間違いなくSVD——通称ドラグノフ——のものであった。

彼はとあるロシアンマフィアの一派の依頼で標的を殺して回っていたのだが、相手側も狙撃手を雇い入れたらしかった。標的の乗るバンの運転手をレナ川に架かる橋で撃ち殺してから、左目の視界の隅にレンズの反射光らしきものを認めてとっさに身を屈めると、コンマ二秒ほど前まで自分の脳天のあった位置——左肩——を銃弾が掠めたのだった。

「窓から五メートルは離れてるつてのに、どんな視力してんだよ」

歩兵支援火器として作られたSVDの有効射程はおよそ五〇〇メートルほどとされている。機構もオペレーティング・ロッドを内蔵したガス圧利用式のオートマチックであるため狙撃銃としてはお世辞にも精度が高いとはいえない。だが、それを以てしてここまで繊細な狙撃ができるのであれば、相当な経験があるものと思われる。

「気付けてよかった。にしてもあべこべな奴だな、腕前の割に動き

が素人臭い……自信家なのか、無知なのか」

先ほどレンツォが見た反射光は、ビルの屋上から放たれていたように彼は思った。念のため地図を広げ被弾位置と壁の弾痕、距離から発射地点を確かめてみる。

彼はこの作業が得意だった。教授から銃弾撃ちを教わっていたとき、弾丸の動きを目で追えない彼は未来予測を極限にまで正確にすることを思いついた。敵の仕草から弾道を見極め、緻密な計算により命中させる。

結局銃弾撃ちの修得は人体の限界によりならなかったが、その代わりに彼に圧倒的な正確さを与えたのだった。

今の彼なら適切なハードさえあれば、三〇〇メートル先の標的でも必殺の自信がある。

相手は撃つてくれとばかりに屋上に陣取るような自信家だ。上手くすれば、裏をかけるはず」

狙撃手対狙撃手の戦いは本来かくれんぼである。状況戦こそが戦いの本質であり、弾を撃つのは戦い全体の内容の一割だ。

「様子を見るにも時間がないしな、ここは思い切って打って出るか」

すでに居場所は突き止められている。ぐずぐずしていれば、すぐにも増援が押し入ってきて八方塞がりになるだろう。対応できないことはないだろうが、それも相手の力量次第だ。

「まったく、世界最強に鍛えられといて何言ってるんだ。俺がこの程度乗り切れないわけがない、あつてたまるか」

そう言ってレンツォは意を決してライフルを構える。敵の位置を確認し、膨大な計算を済ませ、照準し、引き金を引く。この間。

二秒。一。。。分の一秒でカートリッジ内の発射薬が燃え尽き、大威力の三三八ラプア・マグナムがライフル回転しながら銃口を飛び出してスコープの中でSVDを構える特徴的な髪的女性のもとへと進んでいく。

渾身の一撃、しかし彼の目に映った光景は自分の早撃ちすらも可愛く見えるほどの神業だった。

（銃弾撃ち……！？）

その時レンツォは確かに見た。自分の放った三三八ラプア・マグナム弾がSVDの7・62×54R弾によって軌道を逸らされるのを。

拳銃以上に難しい高速の銃弾撃ち。啞然とする彼を、壁に当たったラシアン弾が正気に戻す。

（まずいつ、向こうは連射できる……！）

倒れるよりも速く床に伏せる。再び頭の位置を銃弾が通過した。

「……冗談じゃない。教授以外にこんなことできるやつがいたのか？！」

レンツォにとって教授は次元の違う存在であり、その技も人間の限界を超えたものだとして認識していた。しかし、実際に不可能であるはずの芸当をいとも簡単にこなしてしまう人間が存在した。

「自信のほどが分かったぜ、畜生めが。舐めた真似してくれる」

あの愉快的髪色の女が隠れもせず屋上にいた理由はよく分かった。銃弾程度撃ち落とせる、相手よりも先手をとれる、そんなところだ

ろう。

レンツオの頭の中には二つの感情が渦巻いていた。羨望と歓喜。言い換えれば嫉妬と欲望。

彼は早々にスナイピングで勝つことを諦めていた。彼女には百回挑んでも勝てないだろう、ならばこそその策である。

彼は勝利そのものを諦めたわけではない。彼がほしいのはそもそも勝利の優越感などではない。自尊心を満たす“力”である。その場の勝利による慰めではない。

殺すくらいなら生かして技術を盗む、彼はイ・ウー研鑽派^{ダイオ}だった。

「腕に申し分はない……フフ、俺の相棒に相応しいじゃないか。直接この手で下してやるよ」

レンツオ自身それが防衛機制における“代償”という精神作用であることも理解していた。遠距離で勝てないなら近距離で、最終的な勝利で技術の敗北を誤魔化す。

彼は腰のポーチから一発の弾を取り出した。教授から餞別としてもらった四四口径閃光武偵弾だった。

「まさか半年とたたずしてこれを使うことになるとは。あいつもしかして予知してたのか？」

愛銃、マテバ・オートマチック・リボルバーのシリンダーをスイングアウトし、武偵弾を装填する。シリンダーを元の位置にセットすると親指で撃鉄を起こす。かちゃり、と小気味いい音が鳴った。

「拳銃弾でも曲射すれば七。。メートルくらいは軽く飛ぶ。目にモノ見せてやるよ」

弾道計算を完了し、床に仰向けに寝転がったまま窓の外に武偵弾

を打ち込んだ。音速近い速度で放物線運動をする弾丸を撃ち落とすのは、取り回しの悪い狙撃銃では不可能だ。ましてや相手は女性とあらばなおさらだろう。

二秒待ってからスコープで一瞬覗くと、狙撃手は見事に目を押さえてうずくまっていた。武偵弾は見事にビル屋上に着弾し、彼女の視覚を奪うことに成功したようだった。

「よしっ！」

レンツォはすかさず動力ワイヤーを窓に引っかけ、狙撃銃を手には飛び降りた。地上四メートルほどで手を放し、受け身を取って地面に着地する。流れるような動作で道の脇に停めておいたSUVに乗り込むと、エンジンをかけてアクセル全開で発進した。

後には自動で巻き戻る動力ワイヤーだけが残った。

第二話 ファイター・オブ・ガンマン（後書き）

平均的条件下において、三五七マグナム弾は二キロメートルほど飛ぶそうです。狙いのつけられる範囲は一〇〇メートルないくらいですが。

イタリア製のマテバARは三五七マグナム弾と四四マグナム弾に対応しています。かなりの高威力で、かつピースメーカーよりも実は早撃ちに適しています。

第三話 キャプチャー

レキは突然の閃光に目を潰されていた。

黒髪の少年の潜む窓の奥でマズルフラッシュのようなものがきらめいたかと思えば、二秒後には視覚が白で覆い尽くされていたのだ。武偵弾を使われたのは明らかであった。

「まさか一合で隠し球を出してくるとは……予想以上に柔軟で危険な相手ですね」

たった一回の撃ち合いで単価一万ドルは下らない武偵弾を惜し気もなく消費した。銃弾撃ちを見極めた証拠だ。

優秀な戦士とは自分と敵との実力差を正確に計れる者を言う。無駄な賭けをしない、エキスパートの戦い方であった。

「これは逃げられましたね」

レキはなかなか戻らない視覚の不便を露とも気にせず、SVDの弾倉をリロードする。何度か手のひらでぺたぺたして、コンクリートの床に転がった三つの空薬莖を見つけた。腰のポーチに回収するとSVDを担いで立ち上がった。まだ視力は回復しない。

「入り口にクレイモアを仕掛けていたんです……」

彼女の脳はここに陣取る前に屋上に繋がる唯一のドアの前に対人地雷を仕掛けていたことを記憶していた。

視力の不完全な今、触るのは危険だろう。幸い敵は追撃してこなかったから、恐らく逃走したものと思われる。視力が戻るまで動か

なくてもまず大丈夫なはずだった。

「……念のため着剣だけしておきましょう」

ベルトから銃剣を取り出し、銃の先端に固定する。細身の外見も相まって、SVDは槍のようになった。

徐々に視界を覆っていた緑色の焼き付きが晴れ、視力が戻ってくる。鳥のように鋭い視覚で周囲を見渡すが、先ほどの狙撃手の少年らしき姿は見当たらない。

警戒が杞憂に終わったことを少しずつ感じ始めていると、突然階段へ続くドアが縁に沿ってオレンジ色の火花を散らして吹き飛んだ。クレイモア地雷が反応し、頭蓋骨すら容易に貫通する小さな金属の粒が大量に撒き散らされる。しかしすぐには攻めてこない。

「プラスチック爆薬……」

紐状の可塑性爆薬でドアを破り罫を除去した後突入する心算だったようだが、数百に及ぶクレイモアの金属粒に巻き込まれてしまったのだろうか。プラスチック爆薬の白い煙で奥が見えない。

レキはSVDの引き金に指をかけ、ドアを狙う。すると何やら筒のようなものがドアから投げ放たれた。

（……グレネード！？）

それが手榴弾だと判断したレキは反射的に投げ込まれた缶を撃ち落とす。するとその缶は真つ赤な煙を撒き散らしながら炸裂した。

（煙幕弾……！）

言葉を発するよりも早く、敵が足音を殺して神速の踏み込みを行

っていた。

赤は人間にとって警戒色である。突然目の前で毒々しいまでの赤色が炸裂すれば、人間である限り一定以上の注意を逸らしてしまう。レキと対峙する少年はレキの自信のほどから、投げ込まれた煙幕弾を必ず撃ち落とすと踏んでいたのだ。

レキは再度引き金を引こうとするも、SVDの発射間隔は少年にとって一。メートルほどの距離を詰めるには十分な長さだった。

レキは眼前に迫る黒髪の少年に向けて、銃剣を突き出す。しかしその刺突は斜めから入った少年の逆手に持ったグルカナイフによって銃口と銃剣の間に刃を引っかけられ、狙いを下に逸らされる。

少年の左手がSVDの中ほどを掴み、足払いと共に回転が加わってレキを転倒させた。そのままレキの上に馬乗りになって組み伏せる。

「狙撃の腕はピカイチだが、近距離での駆け引きは慣れてないみたいだな。拳銃も持っていないとは」
サイドアーム

少年は無表情で手にしたナイフをレキの首元に当てて言った。レキは無言で少年を見据える。

「あんた、俺と組めよ」

「分かりました」

少年は一瞬拍子抜けした表情になったが、状況を再認識して無表情に戻った。焦っていたのは案外彼の方だった。

「……断れば、あなたは私を殺すのでしょうか。私はここで死ぬわけにはいきませんので、あなたに命乞いします。仲間になるので助けてください」

「銃を放せ」

レキはSVDから手を放す。死んでも手放さないつもりだったが、本当に死んでしまったら意味がないので素直に従った。

思えば、ここは裏の世界だった。自分の命が他の何よりも尊く、他人の命が他の何よりも安い世界だ。

少年はレキのポケットから携帯電話を取り出し、彼女の依頼人に電話させた。

「——私です。敵の狙撃手には逃げられましたが重症を負わせました、もう銃は握れないでしょう。運転手が死亡したので前金だけで結構です。では、車を待たせているので」

レキが嘘の報告をしたのを確認し、少年——レンツォは拘束を解く。そして自己紹介した。

「レンツォだ。これからよろしく頼むよ」

「レキと言います、よろしく。一つお願いがあるのですが」

「何だ？」

レキはSVDに手を付けずに言った。

「あなたが使っていた銃に興味があります」

「L115A3だな。イギリスの特殊部隊とかが使ってる銃だ。とあるコネで手に入れた……そうだな、これからはお前が使いな、レキ。いつまでもSVDじゃもったいないだろうし」

とあるコネとは、言うまでもなくイ・ウーである。ボストーク号の物資はイ・ウーの諜報員や工作員が手配しているのだ。いくら三年ぶつ通しで潜っていられる性能を有していても、使うのは人間であるため当然と言える。

彼はそこから支援を受け、最新の装備を整えているのだった。

「あなたは何を使うのですか？」

「SR - 15のフルオート改造したのを使うから問題ない。アサルトライフルの派生型だが、SVDより遠くを狙える」

SR - 15はアメリカ軍御用達M4カービンの派生型、SR - 16の民間モデルである。狙撃銃としての性格を強化したSR - 16からフルオート機能をオミットしたものだ。

「分かりました」

レキは改めて自分の銃を取り、肩に担ぐ。レンツォの前を歩き、階段へと向かった。

一階に到達すると、表に日本車らしきSUVが停まっている。鍵が開くとレキは助手席のドアを開ける。

するとレンツォが運転席に乗りながら言った。

「済まないが、後ろに乗ってくれないか？」

レキは無言で助手席のドアを閉め、代わりに後ろのドアを開けて座席に座った。

「この車は改造車だね。防弾素材で車体を覆ってて、後ろの席には

ペリスコープ
潜望鏡とハッチが付いてる」

「まるで装甲車ですね。タイヤもソリッドタイヤでしたし、サスペンションもふかふかです」

そう言っレキは慣れない匂いのする座席の上で何度か跳ねる。彼女の軽い体重で車体が上下に揺れた。

イ・ウーのメンバーによって魔改造されたSUVは、パンクしても走れるソリッドタイヤにスーパー・スペクトラとドラゴン・スキンドで守られており、まさに装甲車といって間違いなかった。手榴弾くらいならもろとしなさそうな頼もしさがあった。

レキにはイ・ウーなどという超人組織のことなど及びもつかなかったが、あえて詮索はしなかった。

「有事に備えて寝るとき以外はそっちに座ってくれ。いざというとき、ハッチを開けて応戦できるだろう」

「はい」

レキが答えると、レンツォはサイドブレーキを解除してSUVを発進させた。

第三話 キャプチャー（後書き）

ドラゴン・スキンとは防弾ベストの方式の一つです。セラミック
スの円盤を鱗状に敷き詰め、わりかし動きやすく良好な防弾・防刃
効果があるとされます。

第四話 香港にて

香港郊外、手にした刃が夕闇迫る汚れた空を写す。

「まず一人……」

トタン屋根から音もなく飛び降り、レンツォは扉の前にいた男の頸椎をグルカナイフで断ち切っていた。脊髓を大きく損傷した男は即死し、そのまま前のめりに倒れこむ。

レンツォは音をたてぬよう男の服を掴んでゆっくりと寝かせると、ナイフに付いた血を男の服で拭き取る。返り血はなく、むしろ路地裏のかび臭い匂いが鼻についた。

（この事務所は小さめだけど……五件目、行きますか）

レキとの邂逅を機にロシアで組んでいたマフィアと契約を打ち切り、しばらくあちこちを転々としながらレキとともに表裏の依頼やイ・ウーのお遣いをこなしていたが、三ヶ月ほどしたある日、仲介人から香港での“掃除”仕事を紹介された。チャイニーズ・マフィアの大口暗殺である。

気前のいい報酬に受諾して、魔改造パジェロと共に海を渡って来たのだ。渡航の手間暇はすべてクライアント側の負担だったし、ロシア東部と同じく日本車は珍しくないため都合だった。

レンツォは愛銃マテバを抜き出入口の扉扉近くに控えているだろう武偵の反撃に備える。

レンツォによりマフィア事務所をすでに四つも血祭りに上げている上、レキによって五人の要人が頭を吹き飛ばされているのだ。警戒も当然と言える。

三つ数えて心を落ち着かせると扉を勢いよく開け放つ。そしてパイプ椅子から立ち上がり懷から銃を取り出そうとする武偵らしき男目掛けて、グルカナイフを投擲した。

「ぎゃあっ！」

至近距離から投げられたナイフに顔を斬り付けられ狼狽える男をひとまず無視して、屋内にいる他二人に集中する。

レンツォは照準のタイミングを計算し、剣でも振るかのようにマテバを真一文字に振り抜いた。絶妙なタイミングで繰り出された二連射で二人の頭に三五七マグナムが食らい付く。窓にバラバラになった脳が血とともにこびり付く。

（まだまだ抜きが遅いな）

早撃ちのスピードに不満を覚えながらも、残った武偵の男を横目に見やる。男はざっくりと裂けた頬を押さえながらマカロフを向けてくる。レンツォが一步下がると銃弾が脇を掠めた。

（弾道が見え見えだ）

銃口の向きや相手の腕力などから発射方向を正確に把握し、弾丸を避ける。^{プロフェンション}“教授”や一部の例外のような超人的な素質など何も持ち合わせていないレンツォは、銃弾を見てから反応することはできない。ゆえにあらゆる予兆や環境条件を察知し、計算によって未来を予測するのだ。

マカロフが排莢と給弾を終える内に次の計算を完了し、再びマテバを振り抜いた。

レンツォ自身の目にも留まらぬほどの速さで振り抜かれたリボルバーから弾丸が飛び出し、男の額に命中した。男は脳を文字通り搔

き混ぜられながらパイプ椅子に強制的に座り直すこととなった。

「五件目終了。帰るかねー」

滞在時間はおよそ三〇秒。驚くほどにスマートな殺戮である。ナイフを拾い上げジャケットの中の鞘に収めると、彼は扉を少しだけ開け外の様子を確認する。

「クリア、だな」

安全と判断してから来た道を戻るべく壁をよじ登る。ステルス・ラバー製のロック・クライミング・シューズが壁に強力な粘着力を発揮し、しっかりとグリップするため非常に登りやすい。しかも靴裏に凹凸がないため足跡も残りにくいおまけ付きだ。

「そろそろ奴らも本気出してくるころだし、蘭豹にぶち当たるのは近いかね？」

忍者——彼自身アサシン出身だが——のような動きで屋根伝いに移動する。そして夕闇に消えるのだった。

／／／

レキはあるビルの上の五階にいた。先月にテナントが撤退したフロアで、まだあちこちにガラクタが残っている。AWM——L115 A3——のテレスコピック・サイトを覗きながら、ひたすら標的を待っていた。

万一にも見つからないため、窓から離れて机の上に伏せながら銃

を構える。

「さすがの蘭豹さんも、父親を殺されると怒るでしょうか？」

レキの六人目の標的は、かの人間バンカーバスター、蘭豹の父親に当たる人物だった。藍幫傘下の一家の頭領である。

二人が受けた依頼は、他ならぬ藍幫からのものだった。内部での派閥争いか何なのかは二人に微塵も興味はなかったが、報酬はなかなかのものだった。彼と彼の娘の首には、それぞれ六〇。万ドルと五〇。万ドルの値がついていたのだ。しかも指定の要人や事務所の襲撃にも別途報酬が支払われる。レンツォはそれでも、クライアントが享受する利益に比べれば微々たるものだと不満気だったが、レキはむしろ香港最強の武偵とやらに関心があった。

「特別がめついつもりはありませんが、資金が多いに越したことはありません」

香港最強の武偵の父親というのだから、それなりの実力者なのだろうかとレキは考える。彼女は遺伝による才能の相続を信じていた。レキとレンツォは現在別々に行動している。移動手段や拠点としてパジェロを使用しているが、お互い仕事をする時間は二四時間不定期だ。一日中戻らないこともあれば、一日中出ていかないこともある。

高層ビルの前に白塗りのリムジンが停まった。高級感溢れるアメリカ車である。これでもかというほど分かりやすかった。

「来ましたね」

ビルのVIP出入口から筋骨隆々とした強面の太男が護衛をぞろぞろ連れて現れた。他よりも身なりが豪華である。手元の写真と見

比べて、間違いなく本人であることを確認する。距離は二〇一五メートル、そのまま引き金を引こうとして、しかしレキは一瞬躊躇った。

「……まるで撃つてくれと言わんばかりの態度、何かあると見るべきですか」

レキは万全を期して索敵をやり直す。すると今しがた標的が出てきた高層ビルの屋上に、先ほどまで見なかった二つの人影を見つける。スコープの倍率を上げると、案の定人影は狙撃手と観測手だった。狙撃手の持つ銃はかなりいいかしい。バレットだろうか。

(……ビンゴ、です)

視界に入った途端、レキは狙撃モードに入る。本命を討ち取るため、この二人は確実に排除せねばならない。

まずは観測手を狙う。より熟達した狙撃手が観測手を勤めることが多いためだ。

目に写るすべての事象から環境条件を把握し、速攻で弾道計算を済ませてAWMの引き金を絞る。三三八ラプア・マグナムが音速の三倍近い速度で飛び出し、観測手の胸に突き刺さった。弾丸は体内への侵入と共に衝撃で肉を大きく押し広げ、内臓をズタズタに引き裂いて絶命させる。

大きくのけぞりながらひっくり返る人影を無視し、レキはボルト・ハンドルを操作して次弾を装填すると、ライフルを構えたまま仲間の方を振り返る狙撃手の頭を撃ち抜いた。

(先に撃たせて私の位置を特定してから反撃しようという魂胆だったようですが、私には通用しません)

ビルの下の人間たちはまるで気付いていないようだった。それもそのはず、二キロメートルも離れていては、サプレッサーで減音されたAWMの銃声など聞こえない。L115A3は“サイレント・アサシン”の異名を持つのだ。

（もつとも、この距離ならバレットの爆音ですら届かないでしょうが）

レキはリムジンに乗り込もうとする標的の大男をサイトに入れると、着弾点のズレを瞬時に計算して狙いを合わせた。

特殊な呼吸法で心拍数を低下させ、心臓の鼓動による照準のブレを抑える。そして最後に呼吸も止めて、レキは世界から切り離された。

（私は、世界最高の狙撃銃……）

自己暗示が始まる。もはや、レキは単なる銃弾などではない。仕事を重ね、プライドが芽生え始めていた。

（撃ち抜けないものはない……）

標的が車に乗り込むその時、気の抜ける瞬間まで目一杯引き付ける。焦らず、標的を見据える。

（あつてはならない……！）

細い指先がAWMの引き金を絞り、撃針が三三八ラプア・マグナムの雷管を叩いた。

.

第四話 香港にて（後書き）

ステルス・ラバー（実在）は粘着力の強い特殊樹脂です。ロック・クライミングやフリーランニングに使用され、壁や岩場など足場の少ない場所でもスパイダーマンのようによじ登ることができます。

誰もやらないのでやってみた。藍幫とドンパチですよ。原作は学園モノなので、学園島周辺でしかイベントが作れないんですね。オリ主とレキが大量殺人犯ですね、まあ裏の武偵なんてこんなものでしょう。

第五話 香港にて（2）（前書き）

蘭豹の経歴は独自設定です。

第五話 香港にて（2）

三三八ラプア・マグナム弾が標的目がけて飛翔する。弧を描き、絶妙な角度で入射した。スコープを覗いたままボルト・ハンドルに手をかける。そこでレキの目は、とんでもないものを捕らえた。

（……ライフル弾を叩き落としましたか）

男はまったく知覚不可能なはずの弾丸を、謎の直感を駆使して手にしたコンバットナイフで反らしたのだ。

（……流石と言ったところですか。ですがあえて言わせてもらいましょう）

コッキングを終えたレキは素早く今にも発進しそうなリムジンに狙いを定める。愛銃の引き金に滑らかに指がかけられ――

「それがどうした、と」

――押し込むと同時に第二射が繰り出された。

衝撃波を生みながら大気の海の中を泳いでいく一発の弾丸。なだらかな曲線が交わる先は、二キロメートル先のリムジンの窓である。そしてライフル弾が銃口を離れて一秒余り、白のリムジンがオレンジ色の閃光と共にひっくり返った。

標的の大男も車から投げ出される。身体中に破片を浴びながら、受け身を取っていた。

レキが使用したのは三三八口径炸裂武偵弾。拳銃用のものよりも遙かに強力な大口徑ライフル用武偵弾である。武偵（不殺）の名を

冠しながらも、その威力は防弾仕様らしきリムジンも一撃で粉碎するほど、殺す気満々の代物だった。

レキは予想以上の威力に感心しながらも、その手は止まらず次弾の装填に動いていた。

（まだまだいきますよ）

リロードして発射、リロードして発射。放たれた二発はまたしても武偵弾。閃光弾と音響弾である。まさに武偵弾のオンパレードだ。一。秒に満たない時間で四万ドル近い金を消費し、遙か二キロメートルの彼方に地獄を作り出しているのだった。

（六。。。万ドルのためなら、武偵弾くらい何発撃っても安いものです）

レキは最初から高価な武偵弾を惜しむつもりはなかった。五発入りの弾倉にはあらかじめそれらが装填されていた。

スコープの向こうには視覚と聴覚を潰され完全に戦闘不能なものたちが蠢いていた。標的の男はまだかなりのタフネスを発揮して起き上がろうとしているが、音響弾で三半規管を狂わされたらしく上手く立てず、立て膝をついている。

レキはボルト・ハンドルを持ち上げて手前に引つ張り空薬莖を排出すると、元の位置に戻して最後の一発を薬室に送り込む。

「六。。。万ドルうまうま、です。死んでください、パパさん」

グリップを握り直し、肘をつきながら左手で銃底の後端を摘む。AWMのスコープのレティクルを男に合わせ、偏差をもとに狙点をずらす。引き金に優しく指をかけ、力まずソフトに引き絞った。

肩に、確かな反動。スコープの中に走るラプアの軌跡が男の右鎖

骨に到達すると、弾丸はそのまま決るように動脈と肺を破裂させ、断末魔すら許さず男を死に至らしめた。

／／／

「何なんや一体！」

蘭豹は憤慨していた。香港武偵高の強襲科訓練棟、視界に入った人間は生徒、教官問わず片っ端から気絶させていた。

変形するのではないかというほどの力で愛銃、S & W M 5 0 0 リボルバーのグリップを握り締める。本当は実弾をとこる構わずぶちかましたかったが、わずかに残った理性がゴム弾の使用に妥協させていた。

「クソッ、あのクズ親父っ！ アタシが殺す前に死にやがって、しかも相手は狙撃手やと？！ ふざけんなや！」

蘭豹はキルハウスの障害物に渾身の蹴りを入れる。コンクリート製のそれが、砂場の城のように粉碎された。

「チキン野郎に安全地帯から一方的にボコられてっ……アホや、ホンマ救い様のないアホや！ あんなんを目標にしまったアタシがバカみたいやないか！」

かつて、幼い蘭豹にとって父親とは憧れの対象だった。強く逞したくまく、そして厳しいながらも優しくかった。その父親の殺害の知らせに、彼女は大いに取り乱していた。

蘭豹は父親が嫌いだ。昔は表の部分を見て満足していたが、一二

歳の時、彼が香港一帯を仕切るマフィアのボスだと知って、彼女の父親への幻想は砕け散った。

幼い彼女は父親をヒーローだと信じて疑わなかったが、その実態は悪党だったのだ。少なくとも彼女はそう感じたのだった。

蘭豹はそれからすぐに家を飛び出して、外国、日本の東京武偵高付属中学に入学した。彼女の父親はそれを止めなかった。言葉の壁もあったが、何とか乗り越えたとし、友人も何人か作れた。

そしてある程度分別が付いてきたところで香港へ戻ることにした。しかし、三年近くメールの一つすら交わしたことはない。かくして二人の間には埋めるに埋まらぬ溝ができていた。

蘭豹は悩むのが嫌いだっただ。今まで自分の力で解決できなかったことはなかったし、ここへ来て『父親との仲で悩んでいます』なんて彼女のプライドが許さなかった。

蘭豹はそれからひたすらに武偵として打ち込み始めた。問題も多々起こしつつも、かつて自身が父親に見たヒーローの姿を目指してそれが彼女なりの父親へのアピールだったのかもしれないが、当の蘭豹はその考えを一笑に付していた。

「アタシがいてこまして捕まえて、それからいてこまして、豚箱にぶち込んだるから覚悟しいや」

蘭豹の瞳が、獣のようにギラギラと光った。

／／／

レキから狙撃達成の報を受けたレンツォは、即日報酬を受け取りに車を走らせていた。

「事務所襲撃の陽動が上手くいったな、金にもなったし。やっぱり別々に動いて正解だった」

時間は深夜。沿岸部に浮かべられた広大な貨物集積用メガフロートにて取り引きは行われる。

無数のコンテナの間をパジェロが抜け、開けた場所に出る。レキはここがよく見えるビルから狙撃銃のスコープ越しに見守っているはずだ。

レンツォは車を停めて、サイドブレーキをかける。

「見えてるか？」

『はい、鮮明です』

レンツォが携帯電話で話しかける。サイトを昼夜兼用の暗視スコープに付け替えたSVDを構えるレキから返答がきた。お互い名前には呼ばない。

「車を出す」

『お気をつけて』

携帯電話から伸びるイヤホンを耳にしっかりと固定し、万一に備えて回線は繋いだままにしておく。ないと思いたいが、武偵対策に念のため暗視ゴーグルで顔を隠す。景色が明るい緑色に一転し、昼間のように見通しがよくなった。

そうこうしている内に黒塗りらしきセダンがやってくる。車が停車したのを確認し、レンツォはパジェロを下りた。

レンツォが左手で三つ指を立てて表に裏にとひるがえ翻すと、セダンの男はその意を汲んで窓を下ろして紙切れを手渡してきた。

「報酬、確かに渡しタヨ」

「ああ、お勤めご苦労さん」

紙切れは所謂小切手だった。スイス銀行とある。大層立派なナリをした紙だった。

すると突然、イヤホンからレキの音が聞こえた。

『狙われています』

その言葉を認識した瞬間、レンツォの身体は動いていた。可能な限り最大の力でバックステップを踏み、パジエロの運転席に駆け込む。何とか被弾を免れるが、セダンの方のタイヤが撃ち抜かれてパンクしてしまう。

気持ち遅れて銃声が二回聞こえた。レンツォの鋭敏な感覚が距離を告げる。

（三三三。メートルと三。。。メートルか……）

ドアを閉めたところで不気味な音が聞こえた。ガラスの碎ける音に交じって、湿った音も存在している。まさかと思って音のした方を見てみると、フロントガラスに亀裂の入ったセダンの中に上顎をきれいに消失した男の死体を発見した。SVDの銃声が遅れて耳にやってくる。

『彼がネズミを連れて来たようですので、責任をとらせました。ネズミは長いポニーテール、蘭豹さんと思われます』

びっくりするくらい淡々とレキが状況を報告する。すぐ近くから

スポーツカーのパワフルなトルクとドリフトならではのスクリーム音が聞こえる。

『他二名の狙撃手の内、一名を無力化。こちらは武偵高の生徒のようでしたので、武器を狙いました。もう一人は私の位置からは狙えません』

「分かった、今迎えに行く」

『了解です』

レキがもつとも饒舌になるのが、こうした通信の時だった。普段は必要がなければ話さない。イエス、ノーで答える時すら、ようやく首振りではなく口で言うようになったばかりだ。

しかしその彼女の言葉は的確で迅速だ。レンツォはレキのそんなところが気に入っていた。

「行くかつ」

レンツォは暗視ゴーグルを外して助手席に放り投げると、サイドブレーキを解除してアクセルを目一杯踏み込んだ。

第六話 香港にて（3）（前書き）

遅れて申し訳ない。

今回はカーチエイスです。

第六話 香港にて(3)

オープンタイプのスポーツカーに乗って、蘭豹はコンテナの間を抜けた。すると正面に見えたSUVに向かって、車ごと止めればこちのものとはばかりに発砲しながら一直線に突っ込んで行く。

「オラアッ！ 死に晒せやあああ！」

凄まじい剣幕で怒鳴る蘭豹に対し、レンツォは何とかハンドルを切って正面衝突を回避する。両車の右側面が擦れ合い、火花を散らした。蘭豹が乗るオープンカーのサイドミラーが宙を舞う。

「とんでもない女だっ……！」

やっとの思いで特攻を回避すると、フロントガラスに狙撃銃から放たれた新たな弾丸が埋まる。

オープンカーは鋭くドリフトすると、全速力で集積場を駆けるパジエロを追跡する。

蘭豹はM500を撃ち切ると、スピードローダーで五発まとめて再装填を行って射撃を継続した。放った五〇〇S&W弾はライフル弾と同じく、車体を貫通するどころか分厚い防弾ガラスにヒビを入れるのが精一杯だった。

「ヒュー、さすがは我らがイ・ウー。いい仕事するなっ」

「クッソ、あいつぁ装甲車か!？」

イ・ウーの技師によって魔改造されたパジエロは、フレームの内

側に強靱な防弾素材を何重にも張り巡らしている。場所と角度次第で五〇口径弾すら受け止めて見せるという、装甲車に近い防御力を発揮するのだ。

蘭豹の手配した狙撃手の射撃が魔改造パジェロのタイヤを捕らえるが、T N K 繊維の編み込みで形成されたラジアルプライを内蔵する上に、もともと空気の入っていないソリッドタイヤである。豆鉄砲でも浴びているかのごとく、まるで意に介していなかった。

「この距離じゃまるで歯が立たん。乗り移るしかないか……応援は張やかが呼ぶやろ」

細々した仕事はすべて狙撃手二人に任せ、蘭豹はアクセルを吹かしてパジェロへと近付く。

すると運転席の窓が開き、中からリボルバーが顔を覗かせた。

「簡単にはやらせへんてか？」

発砲。

オープンカーのフロントガラスが割れる中、蘭豹も負けじと撃ち返す。しかし、レンツォのマテバは正確に蘭豹の頭を狙ってくる。

レンツォと蘭豹の車の運転席はそれぞれ右側と左側だ。蘭豹が乗り移るには必然的に敵の射界に入らなければならないのだ。

「サイドミラー越しに狙つとるんやったら化け物やなっ……しかも明らかに殺しに来とるし！ アタシもターゲットなんか？！」

細かく蛇行して狙いを反らす。それでも、一発一発の精度は脅威的だ。

「見えてるか？ 頭を狙え」

マテバを握る左手で携帯電話を持ちながらレンツォはレキに指示を出す。蘭豹の首にも五〇。万ドルという額がついているのだ。ここでタイヤを撃ち抜いて振り切るのは簡単だが、視点を変えれば困にかかった絶好のタイミングであるため、逃すには惜しい。

『了解です』

レキは短く返事をする、暗視スコープを覗きながらコンテナの隙間に見える蘭豹にSVDで銃撃を加える。

ひんやりとした感覚が蘭豹の背筋を走る。一度味わったら忘れられない、死の気配だ。とっさに首を捻ると、車のリアカバーに穴が開いた。金属の擦れた音が狙撃されたことを彼女に認識させる。

「クソッ、直感もそう何度もアテにできへんぞっ」

二発目を凌いだところで、オープンカーをパジェロの後ろにつけて狙撃から身を守る。じきに倉庫街だ、狙撃手の射界から逃れられるだろう。

『驚異的な直感です。距離が詰まるとかえって当たりにくくなりそうです』

「分かった、撤収の準備をしてくれ。大通りに出たら狙撃頼む。煙焚いて表につけるから」

『了解です』

レンツォはスピードローダーでマテバを一括リロードするとそれを懐のフロント・ブレイク・ホルスターにしまい込み、代わりに据え置きサイドケースからサブマシンガン、VZ-61を引っ張り

出した。マガジン二本をドリンクコーナーに突っ込んで準備万端だ。

「狙撃が有効でないとすると、スコピオン（こいつ）で追い払うしかないか」

パジェロのハンドルを切り大回りに交差点を右に曲がると、内側に入った蘭豹の乗るオープンカーに向けて制圧射撃をお見舞いする。

「うおつと！」

何とかブレーキが間に合い、剥き出しの運転席に銃弾が叩き込まれるのを回避することに成功するが、ボンネットが穴だらけになってしまう。途端に加速力が落ちた。中をどこか損傷したかもしれない。このオープンカーは空冷式のエンジンで、防弾が十分ではないのだった。

「殺すッ、こいつ借り物なんやぞ！ 後悔させたるからなア！」

負けじと砕けたフロントガラスの隙間からM500で撃ち返す。盛大なマズルフラッシュが夜闇にきらめく。

しかし当たらない、いや当てれない。パジェロの窓から見える黒髪の少年——または青年——は首から上はまったく防備されていない。かかったが、その絶妙な射撃タイミングで蘭豹のM500の照準をずらしていた。

お互い自らの半生を戦いに生きてきたのだ。かくして、両者の銃撃戦は熾烈を極めていた。

「しつげえな！」

サイドミラーが500S&W弾で撃ち抜かれ、弾き飛ばされる。

レンツォは窓を閉めて、スコピオンのマガジンを新しいものに差し替えた。

「待てやゴラアアア！」

怒鳴り散らしながら蘭豹も追いつがる。

大通りに出ると、二台の車は派手にドリフトを決めて接触するが、二人はそんなことには目もくれずにカーチェイスを続けた。

「やれっ！」

『はい』

突然、蘭豹の左頬が大きく裂けた。頬骨から顎までの皮膚が切り裂かれ、血が飛び散る。

「ぐっ……！」

続いて右肩。防弾制服越しに伝わる衝撃で脱臼しそうになるが、避けようとした動きで衝撃が吸収され、ギリギリ持ちこたえた。少し遅れて銃声がやってくる。

「クッソ！」

ハンドルを握り直してパジェロの陰に隠れた。頬から血をダラダラ流しつつリボルバーをリロードする。

「フウ、避けんのコンマ一秒でも遅れたら死んどったな」

銃弾の掠めた左頬に手を当てると、べったりと血糊が手にこびり

付く。

「チツ……銃声からしてやっぱSVDやな、技能も半端ない。クソ親父殺したんはあっちで確定か」

パジエロはさらに加速する。蘭豹もそれに追隨するが、レキに睨まれて身動きが取れない。

大通りとはいえ、深夜の香港は一部を除いて静かだった。ここは辺りに倉庫が目立つ港町の片隅だ。夜はクレーンが動かないので車の通りも昼間に比べてかなりまばらで、よって直線道路なら時速一〇〇キロメートル近くまで加速できた。

「モンスターマシンめ……もうクソ、痛いやないか」

イ・ウーの魔改造パジエロは銃弾をもろともせず、それでいて最高速度は時速一〇〇キロメートルを超える。怪物といって間違いなかった。

蘭豹は大きく裂傷を刻まれた頬を抑えながら、右手一本でハンドルを握る。すぐにも止血したいが、状況がそれを許さなかった。

「二〇秒で着く、待ってる」

『撤収準備完了です』

その頃レンツォとレキの二人は、短い会話で行動を確認し合っていた。

あっという間に一五秒がたつと、ブレーキを踏んでパジエロを横滑りさせる。停車するかしないかというところでサイドケースから発煙筒を取り出し、底をドアに叩きつけると白い煙を吐き出す発煙筒を車外へ放り投げた。

「ぐわっ！」

突然急停止し出したパジエロを前に、蘭豹もまたブレーキを踏み込んで停車を試みる。しかし制動距離が間に合わず、三〇度の角度で衝突した。エアバッグが膨らみ、衝撃を吸収するが身動きを制限される。エンジンが停止するも何とか潰れるのは免れているようだった。

「乗れっ」

レンツォの叫びに煙の中をレキがパジエロに飛び込んでくる。ドアを閉めたのを確認すると、レンツォはサイドブレーキを解除してすぐさま発進した。

「追ってくるようならハッチから応戦してくれ、スコーピオンがあるから」

「分かりました」

レンツォは予備のマガジンごとサブマシンガンをサイドケースに放り込むと、運転に集中しだした。

レキは一度マガジンを取り外して残弾が一杯なのを確認すると、暗視ゴーグルをかけてから天井のハッチを開け、後ろを見やった。

このパジエロは天井に内開きのハッチが付いている。内開きなのは、後ろを狙うときの背もたれに使うためだ。ハッチの周りには荷物固定兼体勢保持用のパイプが備えてあった。

「待たんかいつドアホオッ！」

「ここで殺せると完全うまうま状態なのですが、そう簡単には行きませんかね」

エンジンを掛け直して煙を抜けて来た蘭豹目がけてVZ-61が火を吹く。サソリの尻尾のような折り畳み式スケルトン・ストックを肩に当て、小さな身体で反動を押さえ込みながら制圧射撃を敢行した。

蘭豹は身を低くかがめながら車を蛇行させて、嵐のような九ミリ弾の応酬をくぐり抜ける。背中に何発か貰うが、防弾制服が貫通を防いだ。

「いい加減当たれや！」

M500を向けて連射するが、暗視ゴーグルに写る特大リボルバーを目にした途端レキは車内に引っ込む。頭上スレスレを直径。五インチもある巨大な弾丸が通過して鋭い風切り音が耳に届いた。

「レキ、大丈夫か？」

レンツォがミラーに映るレキを見て声をかける。レキは素早くマガジンを取り替えスライドを引いて、スコピオンのリロードを終えると返答した。

「私のことなら心配いりません。ここで死ぬつもりも捕まるつもりも、毛頭ありませんから」

「……そうか、ならいい」

レンツォは思うところがあるのか一瞬溜めてから返した。

ドリフトしながらカーブを曲がる。サイドブレーキに手をかけてハンドルを切るこの瞬間は両手が塞がって応射できない。レキは再びハッチから頭を出して引き金を引いた。

断続的な銃声が閑散とした倉庫街に轟き、マズルフラッシュが閃く。

「きゃっ！」

レキが短く悲鳴を上げる。車内に戻ったレキにレンツォはすかさず心配の声をかけるが、レキは端的に答える。

「擦っただけです。怪我はありません」

スーパー・スペクトラ製の強化防弾服が500S&W弾から彼女の身体を守った。武偵校の生徒が着るような通常の防弾制服なら骨折していてもおかしくはなかったが、複数の特殊樹脂を用いた生地はストレスへの耐性もさることながら、衝撃を受けると分子結合が変化し硬化するのだ。

「そろそろ決着を付けます」

レキはサイドケースから拳銃のようなものを取り出して呟いた。

「一発当てたけどあの分じゃ全然効いてないやろな。用意周到すぎるやろっ」

M500の再装填を終えると三度青い髪の高ーグル少女がパジェロのサンルーフの位置から顔を出す。

蘭豹は制圧射撃に備えて頭を下げて射撃するが、パジェロが小刻みに蛇行してなかなか当たらない。するとパジェロが急減速しだし

た。オープンカーよりも遥かに高い車高のパジェロが壁のように迫る。

手榴弾を投げ込まれることを危惧した蘭豹は即座に減速して車間距離をとる。そうしなければ射線も通らないのだ。

「なっ！」

しかし蘭豹の危惧は杞憂に終わったようで、パジェロは再びアクセル全開で加速する。

蘭豹もそれに置いていかれないようにアクセルを踏むが、両者の間が二メートルほど空いたところで先ほどの危惧よりもずっと質^{たち}の悪い現実が彼女を襲った。

「カンブ・ピストル！？」

魔改造パジェロのハッチから顔を出すレキの手に握られた極太の拳銃のようなものから白い尾を引く擲弾が放たれ、オープンカーのボンネットに着弾した。擲弾は成形炸薬により頑丈なはずエンジンフレームを易々突き破り、奥にある燃料タンクに火を点けた。

ワルサー・カンブ・ピストル。もともと信号弾の発射器だったものを単発式グレネード・ランチャーに改修した銃だ。最小の対装甲兵器である。

成形炸薬弾によりオープンカーは吹き飛び、バラバラになりながら派手に前転した。ギリギリ着弾前に脱出した蘭豹は大小の傷を作りながら路面に転がった。

「こんのオ、覚えとれえええ！」

パジェロはすでに彼方に走り去っていた。
後には蘭豹の悔しげな叫びと大破したオープンカーだけが残った

の
だ
っ
た。

.

第七話 香港にて（４）

蘭豹を退けたレキとレンツォの二人は、パジェロと共にトラックのカーゴの中にいた。あの後追跡を免れるためにトラックで回収したのだった。

レンツォはパジェロの天井に設置されたライトを点灯し、後部座席に移動して被弾したレキの手当てをしていた。強化防弾服と言えど、食らったのは五。口径の弾丸である。案の定、レキの左肩にはアザができていた。

「大したことはありません」

意識的か無意識なのか、強がるレキを尻目にレンツォは湿布を張りつけていく。

「すぐ治療できる傷に医療器具を惜しむ必要はない。僅かな感覚の乱れも、狙撃に影響するからな……それに、跡が残ったら俺が嫌なんだ。レキに、怪我してほしくない……」

後半になるにつれて声が小さくなるも、レキの耳はしっかりとそれを捉えていた。ばつの悪そうな顔をしながら視線を湿布の張りたくられた肩に固定するレンツォに、レキは問う。

「なぜあなたが気にするのか分かりませんが……少し張りすぎでは？」

無表情で小首を傾げるレキ。ふわふわとした短髪が揺れる。本人は自覚がなかったが、その仕草はとても愛らしかった。

レンツォはそんなレキの髪に指を絡めて言う。

「目に見えないアザもあるんだ。皮膚のアザよりも、所々の筋肉の断裂の方が狙撃手としては重大だ。アザは……俺が気になるだけ」

レンツォはひとしきりレキの髪を堪能すると、最後に湿布だらけのレキの肩を一撫でしてから助手席に移動して愛銃の分解清掃を始めた。

レキには彼の行動の意味は分からなかったが、大事にされているのは肌で感じていた。

（まるで狙撃銃を扱うような手付きです……我ながら言い得て妙ですね）

レキにとつて頭を撫でられたりといったスキンシップの経験は彼にされたのが初めてである。故郷では大事にされていたが半ば隔離されて育ったため、そのことに気付くのも何年もの時間を要した。しかし、レンツォの場合は同じ“大事にする”でも少し種類が違ふようであった。

（彼に撫でられるのは悪い気はしませんが、何だかふわふわした不思議な気分になります）

そのやり様からレンツォにとって自分かなり重要な存在であることを推測する。ふと、レキ自身もレンツォを受け入れていることに気付く。

（まだ彼とはたった四ヶ月の付き合いですが、思いのほか私も警戒が解けているようですね。私は一応脅迫されている身なのですが）

レキは狙撃手としての自分の有用性を自覚している。二。。。メートル先の標的に初弾で命中させる神業を持つ腕だ、誰もが欲しがるだろう。レンツォが大切に扱うのも当然と言える。対してレキにとってレンツォはクライアントでありスポンサーでもある。今回のような大きな仕事も、愛用しているAWMも、すべて彼がいたからこそのものだ。レキにとってもレンツォは大切な存在である。

（しかしそれだけではないでしょう。単なる信用ではなく、信頼が生まれているように感じます）

レキは助手席でマテバの銃身に清掃器具を突っ込んでいるレンツォを見ながら、自分たちのこれからを考える。

（レンツォさんはどうやら何かしらの組織に加担しているようですが……私も一枚噛むべきでしょうか）

VZ-61を分解して手入れを始めながらレキは聞いた。

「今まで気になっていたのですが、これほどのバックアップはどこから来るのでしょうか」

急な問にレンツォは一旦手を止めると、再び動かしながら答える。

「イ・ウーという秘密結社を知ってるか？」

「はい、名前だけなら」

レンツォは若干驚きながら振り返る。レキは先ほどと同じく首を傾げた。

すると一瞬考え込むような仕草をとってから、レンツォはマテバ

の整備に戻った。

「イ・ウーは特定の存在目的を持たない特殊な集団だ。プロフェッション“教授”を筆頭に、各々が独自の目的のために行動している」

「それで組織が成り立つのでしょうか？」

レキが尋ねる。

「教授という個人の圧倒的な武力で一応組織としての体裁を保っている……と言っても、烏合の衆ってわけじゃない。世界中で才能のあるやつらがスカウトされ、組織内で技術の交換や相互援助がなされてるんだよ」

「独自のネットワークを形成している、と」

「そういうこと。この車も、銃も、あらゆるライフラインもそれに依存している。だからこそ、そんじょそらのフリーランスよりも遥かに高いクオリティとステルス性を得られる」

蓮根状のスピードローダーに三五七マグナムをはめ込みながら、レンツォはつらつらと喋っていく。彼はレキを信頼していた。

一部の国では国家機密だから吹聴するなよ、と締めてから彼は弾薬ケースから箱詰めされたカートリッジを取り出して、手袋をしながらVZ-61のマガジンに詰め直していった。

「……私は、ウルスの人間です」

「見れば分かるさ」

お返しとばかりに切り出したレキだったが、今度は彼女の方がきよとんとしながら視線をレンツォに向けることとなった。
レンツォは何でもない風が続ける。

「淡い青の髪はウルスの姫の証」

ミラー越しに頷くレキを認めて、彼は話を進める。

「教授から琉璃色金については聞いている。教授は緋緋色金を保有しているからな。ウルスも把握しているはずだが……知らされていないか？」

再度頷くレキに、レンツォは言う。

「……まあ、今は修行段階だもんな。仕方ないか。とにかく、お前が旅してる理由も知ってるから、相棒としてそれは尊重するよ」

短く謝辞を述べるレキに、複雑な表情をしながらもレンツォは続けた。

「さて、俺たちはこれから別の車に乗り換える。このパジェロはもう使えないから、イ・ウーの連中が回収して別の地域に投入するだろう」

「私たちはどうしますか？」

「車は今夜中に乗り換えて、俺は武偵相手に諜報活動。レキは蘭豹を監視」

「分かりました」

ミーティングが終わり、レキはレンツォを置いて眠りに就いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8829u/>

レキ「ボルト・アクション式以外は認めません(キリッ——ただしSVDは別腹

2011年9月21日21時33分発行